Hondaの交通安全情報紙
SJ
Since 1971

～Safety for Everyone～
Hondaはすべての人の
交通安全を願い活動しています。

2・3
2013
FEBRUARY・MARCH

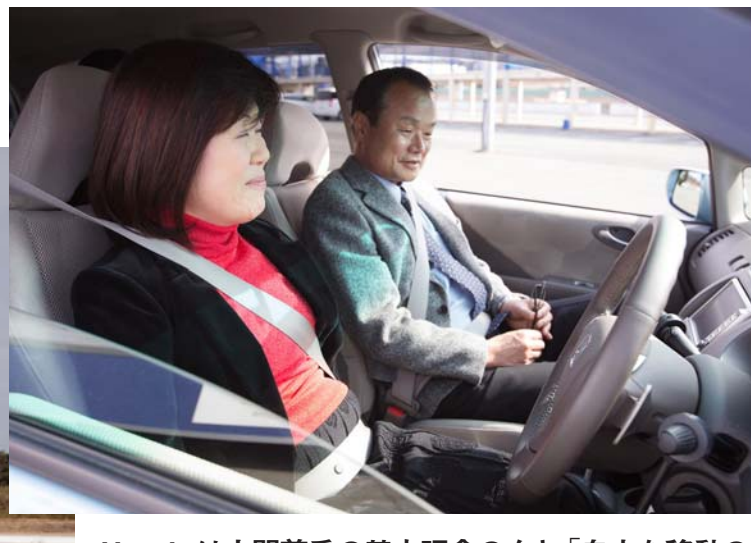
●編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107-8556 東京都港区南青山2−1−1
TEL 03(5412)1736
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/
●編集人：千葉英雄
※年間購読をご希望の方は、下記までお問合わせください。
㈱アストクリエイティブ 安全運転普及本部係
TEL 03（5439）1191 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

SJホームページは ホンダ SJ 検索

CONTENTS

対談：白井のり子・伊東孝紳
自らクルマを操る楽しさをより多くの人へ……❶
現場訪問／アクティブセーフティトレーニングパークもてぎ
安全運転指導セミナー……❹
TOPICS①／リハビリテーション向け実車安全運転サポートプログラム……❹
NEWS REVIEW／2012年Honda安全運転普及本部 年末ご挨拶会……❹
TOPICS②／Honda Cars 山陰中央 ③／久喜地区親子交通安全教室
④／九州地区交通安全普及活動合同報告会
関東・甲信越地区交通安全普及活動報告会……❺
STREAM／熊本県での高校生交通安全教育活動 第4回……❻
危険予測トレーニング（KYT）／路地からクルマが出てきた時（自転車）……❼
指導者ファイル／交通安全協会大分東支部・女性交通指導員の皆さん……❼
SJクイズ……❼
DOCUMENT EYE ㉕／薄暮時と夜間に歩道を走る自転車を観察する……❽

# 対談 自らクルマを操る楽しさをより多くの人へ



**Hondaは人間尊重の基本理念のもと「自由な移動の喜び」と「豊かで持続可能な社会」の実現をめざし、安心して自由に移動することができ、乗って楽しいクルマづくりとともに、身体の不自由な方々が運転できる場と機会の提供をしている。個人のパーソナリティを大切にしながら、身体にハンディキャップを持つ方々の自立に役立つために、自動車メーカーとしてどのように取り組むべきか、足だけで運転できるHondaフランツシステムを搭載した第1号車のお客様である白井のり子さんと、伊東孝紳・本田技研工業（株）社長に語り合っていただいた。**

**伊東孝紳** 本田技研工業株式会社 代表取締役 社長執行役員　**白井のり子** ライフミッショナリー

## チャレンジ精神が原点

**伊東**　先ほど、白井さんの運転を拝見しましたが、とてもスムーズな運転でした。運転を始めて、何年になるのでしょうか。

**白井**　運転免許を取得したのが20歳でしたから30年になります。通勤で毎日、運転していて、今日も対談の会場である交通教育センターレインボー熊本までクルマで来ました。

**伊東**　30年ずっと運転しているから、上手なわけですね。

**白井**　両腕のない私が運転免許を取得できたのは、ホンダの関係者の皆さんに支援していただいたおかげです。私は子どもの頃から、とても好奇心旺盛な女の子でした。両腕がないから何もできないと思われている自分がとても悔しかったのです。他の人と同じようなことを何でもやってみたいという思いを常に持っており、これまで「絶対にできる」と信じて、様々なことにチャレンジしました。

**伊東**　映画「典子[※1]は、今」への出演は、白井さんにとって大きなチャレンジだったと思います。映画のラストで、船から海に飛び込むシーンに、私は一番感動しました。海で泳いだのは、あの時が初めてですか。

**白井**　大海原のなかを泳ぐのは初めてでした。公開当時、映画館でそのシーンが流れた時に「危ない！」という声を出された方がけっこういたそうです。実は、あのシーンはもともと台本にはありませんでした。撮影が始まって監督さんから水泳ができるか聞かれ、体育の授業の時にプールで泳いだ経験があったので、「じゃあ、泳いでみようか」という話になったのです。

**伊東**　映画の撮影のなかでも、白井さんは様々なことにチャレンジされていたんですね。ホンダにとっても、チャレンジ精神は原点であり企業文化です。創業者の本田宗一郎は、「人の生活を便利にしたい」「人に楽しんでもらいたい」そういうことに対して、非常に旺盛な意欲をもっている人でしたから、私たちも「喜びの創造」「喜びの拡大」「喜びを次世代へ」ということをめざして、常にチャレンジし続けています。

**白井**　そうしたホンダの姿勢は、本当にすばらしいと感じています。私が運転免許を取得するきっかけとなったのは、1981年1月にセーフティクラブ[※2]肥後（以下、SC肥後）という組織に入会したことです。当時、地元販売会社であるホンダ肥後（現、ホンダカーズ熊本）の営業スタッフで、SC肥後の事務局長でもあった刀川（たちかわ）哲也さんと、私が勤務していた熊本市役所で出会ったのが始まりです。SC肥後は、障がいを持った方自らが運転を楽しむ仲間と集まり、クルマを通して障がい者への理解と安全運転を広く訴えようと1978年に発足しました。SC肥後には、障がい者の行動範囲を広げるために、より多くの人に運転免許を取ってもらいたいという願望があったのです。そうした背景から、入会した私に足だけで運転できるクルマで免許を取らせたいという目標が生まれたと聞いています。そして、刀川さんは足だけで運転できるクルマの開発をホンダにはたらきかけてくれました。

**伊東**　私たちは個人の楽しみや喜びを追求するため様々なモビリティをつくっているわけですが、個人にもいろいろな方がいらっしゃいます。白井さんのようなケースに対しても刀川さんが動き始めて、「やってみよう」となったのは、相談を受けた安全運転普及本部など関係する社員一人ひとりに「個人のパーソナリティを大切にしながら、その人が活躍できる場と機会の拡大をサポートしたい」という共通の考え方があったからだと思います。そして、白井さんが「いろいろなことに積極的にトライしよう」という考えを持っていたのも大きい。そうでなければ、

最初からあきらめてしまったかもしれません。

**白井**　それまでの人生では、自分がクルマを運転するなんて考えてもみませんでした。しかし、ヨーロッパには足だけで運転できるクルマがあるという話を聞いた時、そのクルマがあれば、「もしかしたら運転できるかもしれない」という希望と、持ち前のチャレンジ精神がわいてきたのです。SC肥後に入会して4ヵ月後には、足だけで運転できるホンダ・フランツシステム[※3]試作1号車が完成し、試乗することができました。その時、まったく白紙の状態から日本初のフランツシステム試作車をわずかな時間でつくり上げてしまったことに、ホンダの皆さんのパワーと情熱を感じました。

## 自由に移動できることが自己実現の喜びにつながる

**伊東**　その試作車を初めて動かした時は、どのように感じられましたか。

**白井**　「本当に運転できるのだろうか」という不安もありましたが、「運転してやるぞ！」という前向きな気持ちのほうが強かったですね。アクセルとブレーキ、ハンドルを正しく操作すれば動かせると思っていましたので。第一声は「あっ、走った！」という言葉で、当時の新聞の大見出しになりました。その時は、私と同じような境遇の方々のために頑張らなければいけないという責任も感じました。その後は、運転免許取得に向けて全力を注ぐために、刀川さんの指導のもと、自動車教習所のコースを借り、仕事が終わった夜7時から8時以降、毎日練習を重ねました。その間、ホンダの皆さんが警察庁など関係省庁へのPR活動を行ったことで道路交通法が改正され、両手が不自由な人にも運転免許取得への道が拓かれたのです。そして1982年7月、私は運転免許を取得することができました。

1981年8月、三陽自動車学校においてシビックを運転する白井さん

1982年8月、セーフティクラブ肥後主催の法改正達成祝賀会でメンバーから祝福を受ける白井さん（写真中央）

**伊東**　白井さんがSC肥後に入会して、約1年半で運転免許を取得できたわけですね。短期間で試作車をつくるだけでなく、国を動かして法律まで変えてしまった。こうした当時の関係者のスピーディな行動は、私も憧れます。関係した方々の情熱が1つに結びついた成果と言えるでしょう。あらためて敬意を表したいと思います。

**白井**　クルマを運転できるようになって、行動範囲が拡がったというのが私にとってはとてもうれしいことでした。「足があるから歩けばいいじゃないか」という話もありますが、手が不自由な人はやはり行動範囲というのが限られてきます。荷物を持てなかったり、雨の日は傘をさせなかったり、自由な行動というのが制限されるわけです。制約されず、自由に行動できるということは、誰にとっても喜びではないでしょうか。今、クルマは私の身体の一部として、かけがえのないアイテムになっています。

**伊東**　そう言っていただけると、たいへんうれしい。

**白井**　クルマを運転するようになって、人生観まで変わったように思います。運転が苦になることはまったくありません。今でも運転は大好きです。

## 福祉車両の普及に合わせて安全運転教育の機会も提供

**伊東**　ホンダは自らクルマを運転することで、「自由な移動の喜び」をお客様に感じていただくことを追求しています。その実現のため、運転する「人」を主役に考え、ハードであるクルマづくりとともに、ソフトである安全運転教育に取り組んでいます。これは福祉領域においても同じです。今後、技術が進化していくなかで、さらにいろいろな方が運転するチャンスが拡がることになると思います。白井さんは運転される時、どのようなことに気をつけているのでしょうか。

**白井**　やはり、当たり前のことではありますが、前後左右の確認です。特に発進する際の周囲の確認、そういったものは心がけてするようにしています。これまで無事故でこられたのも、刀川さんにそうした安全確認の重要性を繰り返し教えていただいたおかげです。

**伊東**　今まで無事故でこられたのはすばらしいですね。どんなに技術が進化して便利になっても、運転が疎かになってはいけない。一番大切なのは、クルマを運転している人がいろいろな装置やシステムに助けられながらも、自分が運転しているという自覚をもってもらうこと。それがより快適に、より楽しんで運転するということにつながるのだと思います。

ただし、その一方でクルマの運転は交通事故という不幸をつくり出すきっかけになることもあります。ですから、そうした不幸を無くしていくということを同時に考えながら、私たちは行動しないといけません。そのために、私たちは「Safety for Everyone―すべての人の安全をめざして」事故のない社会をつくりたいという考えのもと、ソフト領域である安全運転普及活動を40年以上にわたって継続しています。しかし、そのほとんどは健常者を対象にしたものでした。昨年、「障害者総合支援法」[※4]が成立したことからも、今後、身体が不自由な方々が交通社会へ参加する機会が増えることが考えられます。しかし、こうした方々への安全教育の機会はほとんどないのが現状です。そこで、私たちは身体が不自由な方に対し、車両運転時の安全性確保に向けた教育機会を提供していくことが必要だと考え、ホンダの特例子会社で多くの障がい者が働いているホンダ太陽（株）や（株）レインボーモータースクール、（株）モビリティランドとともに、安全運転に関する共同研究をスタートさせました。2013年度以降、ホンダの交通教育センターをはじめ、全国で活用していただけるよう取り組んでいるところです。福祉領域もカバーしていくことで、よりすべての人の安全をめざしていきたいと考えています。

**白井**　私が運転を始めた頃は、「障がいがあるのに、何で運転するんだ」という声が聞かれるような時代ですから、そういう声を払拭することが、自分が背負っている使命だと思っていました。だからこそ人一倍、安全運転を意識してきたつもりです。

私はホンダ・フランツシステム搭載車のドライバー第1号ということで、パイオニアという自負があります。30年が経過しましたが、フランツシステム搭載車はヨーロッパ諸国に比べ、日本国内ではその10分の1に満たない台数しか走っていないというこ

# 白井のり子 ●Noriko Shirai

1980年熊本市立高等学校（現、必由館高等学校）を卒業し、熊本市役所に入庁。
81年映画「典子は、今」に出演。82年、普通自動車運転免許取得。
2006年熊本市役所を退職後、「スマイルビー白井のり子事務所」（熊本県合志市）を設立。
ライフミッショナリー（命の大切さを伝える人）として講演活動を行う。

# 対談：自らクルマを操る楽しさをより多くの人へ

とを聞きました。それはなぜだろうと考えると、足だけで運転できるクルマを知らない方が増えてきているからだと思うのです。当初は、新聞でそういったクルマが開発されたということで多くの方がご存知でしたが、今の若い世代には知られていない。しかし、足だけで運転できるクルマを必要としている若い方は全国にたくさんいらっしゃるはずなのです。やはり、今以上にフランツシステム搭載車を普及して、より多くの方が選択できる機会を設けていただきたいと思います。私自身も協力を惜しまずに、ご覧になりたいという方がいらっしゃれば全国をまわって「こうやって運転すれば安全ですよ」ということを実際に見せてあげたいと考えています。

**伊東**　ありがたい申し出に感謝します。今のお話をうかがって、ホンダ・フランツシステムをつくった私たち自身が、もっと普及拡大に努めていかなければいけないと改めて感じました。そうしたこともふまえ、今、オレンジディーラーの強化を推進しているところです。オレンジディーラーは「福祉」という視点から、クルマの販売を通して地域社会に貢献する、ひとにやさしい販売会社です。福祉車両の試乗車や展示車をご用意し、バリアフリーの店づくりにより、あらゆるお客様の移動の喜びの実現に向け、お役に立てるように取り組んでいます。

**白井**　全国にオレンジディーラーが増えていけば、福祉車両がより多くの方々の身近な存在になるでしょう。現在、足だけで運転できるクルマを日本国内で提供している自動車メーカーは唯一ホンダだけなので期待しています。

## 自由な移動の喜びは空へ、そして宇宙へ

**白井**　今回、伊東さんとの対談の機会をいただいて強く思ったことがあります。四輪車の「シビック」を運転することができたので、次は「空飛ぶシビック」を操縦して、大空をはばたいてみたいと。

**伊東**　なるほど。「HondaJet」（小型ビジネスジェット機）のことを、開発者は「空飛ぶシビック」と呼んでいます。

**白井**　海外では足で飛行機を操縦する方がいらっしゃるそうなので、ぜひ日本でも実現させたてみたいのです。チャレンジに年齢は関係ありませんから。

**伊東**　確かに「HondaJet」を使えば、もっと遠くに行くことができます。私も操縦してたことはありませんが、きっと気持ちいいでしょう。人間にはどこかに移動しようという欲求もあるし、また移動すること自体には楽しみもあります。それでホンダは飛行機まで開発したわけですが、私個人としては、宇宙へ行くことを夢見ています。そして、宇宙から地球を眺めてみたい。

**白井**　私の夢より、むしろ現実的かもしれないですね。

**伊東**　地球の外へ出てみたら人生観が変わると、私は思っています。宇宙から地球を眺めることで「地球は1つである」という感覚がより実感できるでしょう。そうすれば、「広い宇宙のなかの小さな地球のなかでいがみ合ってどうするんだ」という気持ちになって、世界はもっと平和になるはずです。だから、誰もが自由に宇宙と行き来できるようになるといい。そうした新しい世界を切り開いていけるようなチャレンジをやってみたいと思います。

## 伊東孝紳 Takanobu Ito

1978年京都大学大学院工学研究科修了後、本田技研工業に入社。
2000年本田技研工業取締役。本田技術研究所常務。
03年本田技研工業常務を経て、05年同常務執行役員。07年同専務。
09年本田技研工業社長、現在に至る。

## 誰にでも機会は均等に与えられるべき

**白井**　私は熊本市役所に1980年に入庁し、26年間、勤めました。そして2006年に退職してからは、全国で300回近く講演を行いました。私の生き様を通して、命の大切さを改めて考えていただけるような場を提供したいという思いを込めて、「命の大切さを伝える人」を意味する「ライフミッショナリー」という肩書きを使っています。講演活動は今年3月から一時休止しますが、これまで全国各地をまわったことで、いろいろな方との出会いがあり、また多くの励ましをいただけるなど有意義な時間を過ごすことができました。

**伊東**　「命の大切さを伝える」ということでは、私たちが普及している交通安全教育にも通じるところがあります。ドライバーやライダーはもちろん、運転者以外の子どもや、中学・高校生、高齢者を対象とした安全教育にも、意思を持って力を入れてきました。ホンダと警察や自治体などが一体となり、各地域で安全な交通社会を実現するために活動しています。こうした活動ができるというのも、私たちの大きな強みです。

**白井**　交通社会も含め、すべての人がお互いを補い合いながら生きていける社会というのが一番の理想だと思います。

**伊東**　白井さんが育ってきた環境は、それに近いものがあるのでしょう。だから、今の白井さんがある。ホンダには「人間尊重」という理念があります。これは、どなたにも機会は均等に与えられることだと、私はとらえています。

**白井**　そうした理念があったからこそ、私の運転免許取得への道も拓かれたということですね。クルマがなければ、私も今、小さな小さな人間になっていたかもしれません。ホンダの皆さんにめぐり合えたのは、私にとって最大の幸運だったと思います。

**伊東**　身体が不自由だから限られた社会だけで生活できればいいというのではなく、みんなが同じ環境のなかで一緒に生活していくということがいろいろな可能性を拡げることにもなり、とても大事だと思います。とりわけ移動ということに関しては、私たちがそのような環境を用意するのが務めであり、ホンダ・フランツシステム搭載車をはじめ福祉車両の提供を通じて、身体の不自由な方が社会により参加しやすい環境をつくっていきたいと考えています。

そして、そうした活動をしていく上で、忘れてはいけないのは「人が好きで、人を大事にして、人が喜ぶ姿を見たい」という気持ち。これは創業者である本田宗一郎の想いであり、すべての原点です。その想いを大切にしながら、今後も私たちは様々なパーソナルモビリティを提供し、より多くのお客様の「自由な移動の喜び」の実現に向け、お役に立てるよう取り組んでいきます。

白井さんは現在の愛車フィットで交通教育センターレインボー熊本に併設されたサーキットを体験走行

●白井のり子さんの活動は以下のホームページでご覧いただけます。
また、ホームページ内で映画「典子は、今」のDVD版や著書も販売されています。
http://www.smileb.com/

●白井さんの運転免許取得の詳細については以下のホームページでご覧いただけます（小説　本田技研「第四話　安全は、こころ」）。
http://www.honda.co.jp/novel-honda/kokoro.html

※1　映画「典子は、今」＝1981年10月に公開され、空前のヒットを記録した作品（監督・脚本：松山善三）。母親が妊娠中にサリドマイド（睡眠薬）を服用したことから、両腕がない状態で誕生した娘。失われた両手を悔やむより、残された身体で何が出来るのか、母と娘が力の限り生きることに挑戦する姿が描かれている。当時19歳の白井さんが主人公の娘役を演じた。

※2　セーフティクラブ＝Hondaが1971年、新聞広告で宣言した安全運転普及のための活動の1つ「安全ドライビングクラブの結成促進と支援」の一環として、1972年、安全運転普及本部内にセーフティクラブの事務局を設置。これにより全国のドライバー、ライダーに呼びかけ、安全運転の普及を目的とした会員組織として、本格的にHondaのセーフティクラブが各地で誕生。その最大の特徴は、安全運転の実現に向けHondaの顧客のみならず、すべての二輪・四輪の運転者を対象としているところである。

※3　フランツシステム＝左足元のペダルを自転車のように漕ぎ、ハンドル操作を行って運転できる装置。一人ひとりの身体特徴にあわせて調整が可能になっている。仕事中に両腕の機能を失った技術者、エーベルハルト・フランツ氏が開発した。

※4　障害者総合支援法＝障がい者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律。地域社会における共生の実現に向けて、障害福祉サービスの充実等を総合的に支援するため、新たな障害保健福祉施策を講ずるものとしている。